

戸報

No.55

佐賀県教育センター

佐賀県佐賀郡大和町川上

TEL 0952-62-5211

もくじ

○ 卷頭言「情報化教育の推進に向けて」	1
○ 平成2年度研修事業の実績と平成3年度の構想	2
○ 生活科講演要旨「新教育課程と生活科」(大阪大学人間科学部 助教授 梶田叡一)	4
○ 平成2年度研究紀要の概要	5
○ 指導のチェックポイントー中学校国語・生徒指導	7
○ 平成2年度長期研修生寸感	10
○ 私のすすめる一冊の本	12

卷頭言

情報化教育の推進に向けて

佐賀県教育センター 研修三課長

吉 武 正 義



佐賀県庁の新庁舎が完成し、平成3年2月から業務が開始された。地上13階建の新庁舎は、情報化社会に向かっての行政棟にふさわしく、ISDN（統合デジタルサービス網）や、汎用コンピュータの導入に対応できる庁内LAN機能の設備など、高度情報機能を集積した「インテリジェント・ビル」である。

このような新県庁舎の完成は、本県における情報化促進の起動力となり、高度情報化社会の実現に向けて、その円満な発展の基盤になると思う。

21世紀に向けて、情報化は一層進展するものと思われる。目指す通りの高度情報化社会を開花させるには、人々の情報化に関する知識・技術の習得や、情報化を推進するための人材の育成が必要不可欠である。

特に、これから的情報化教育は、コンピュータや通信技術の専門家を育てるだけでなく、人々の情報リテラシーを啓発することが極めて重要である。それだけに、情報リテラシーの開発教育は、学校教育が取り組むべき大きな課題である。

これまでの情報化は、コンピュータ技術の進歩に支えられて、量的な拡大が中心となってきた。そのためか、質的な問題が山

積みしており、高度情報化社会の実現に向けて、一つ一つの課題への的確な対応が急務となっている。すなわち、情報処理技術者等の人材の育成や情報化教育の充実、ソフトウェアの不足への対応、開かれたネットワーク化の推進などの具体的な対策が必要とされる。教育センターにおいても、このような問題を把握するとともに、高度情報化社会に即応した研修や実習の実施が必要である。

「環境は人を創る」という。教育センターとして、高度情報化社会に向けての人材育成や情報化教育の推進を目指すとともに、それにふさわしい、FAシステムの導入、学校とのオンラインの開設、教育情報データベースの構築・提供のためのパソコン通信システムの設置など、施設・設備の充実が望まれる。

更に、全ての研修室や演習室等にパソコン端末を置いて、汎用コンピュータをホストコンピュータとしてのLAN機能を設置、種々のソフトウェアを使っての研修講座や研修業務への利用は、情報化社会の要請ではなかろうか。

名付けて、「インテリジェント・センター」の実現もそう遠くはないだろう。

平成2年度研修事業（短期研修講座）の実績と平成3年度の構想

1 平成2年度の実績

- (1) 短期研修講座、実施にあたっての基本的な考え方は、次のとおりである。
 - 教職員の資質・能力の向上に役立つために、計画的な研修を行う。
 - 研修内容の改善・充実を図り、教育指導上の課題や社会の変化に対応した実践的研修を行う。
 - 研修方法に創意工夫を加え、受講者が意欲的に研修に参加できるように努める。

これらを柱にして、126本の講座を実施した。受講者は総数2,900名で、定員より38名上回り、上記3点の目標は、ほぼ達成できた。

- (2) 本年度から改善された点について

時代の要請と学習指導要領の改訂に対応するために、次のような講座を新設した。

①新設教科「生活科」へ対応するために小学校低学年に新設される「生活科」に対応するために、4本の講座を開設した。定員120名に対し、162名の受講者希望があり、135名が受講した。

②豊かな情操と感性を育むためにこれまで1本であった小学校図画工作科の講座を、発達段階に応じた研修にするために、低学年、中学年及び高学年の3講座に増やした。定員60名に対し、130名の受講希望があり、102名が受講した。

③情報化へ対応するために情報化及び技術・家庭科の男女共修に対応するため、中学校技術科の講座を3本（「指導法」、「実験・実習」「コンピュータの活用」）と高等学校家庭科の講座3本（「生活一般」「コンピュータの基礎と活用」「電気・機械」），計6本を開設した。

(3) 短期研修講座の領域別、校種別受講状況

講座の領域	校種	講座数	定員	受講者数		
					N	1.0
教科	小学校	26	664	750		
国・社・算(数)・理・生活・國(英)	中学校	17	309	300		
高等學校	高等學校	17	296	266		
音・技・家・英	合同(小・中・高)	3	72	69		
経営等	小学校	13	380	305		
道場・特活・へき地	中学校	10	260	235		
・評議・学校経営・	高等學校	10	275	249		
学年総合・学級経営	合同(小・中・高)	7	105	69		
・事務・パソコン等	幼稚園	1	80	102		
教育相談	合同(幼・小・中・高・特)	11	326	453		
情報処理	職業高校	11	95	82		
総合	合計	126	2,862	2,900		

(4) 講師招聘状況

地域	平成2年度		受講定員
	計	内訳	
県内	61	94	1,998
大学等(佐大、短大他)	249		
教職員、教育庁関係			
県外	46	47	
九州内大学等	14	12	
近畿以西大学等	11	10	
中部以東大学等			
総計	381	361	

(5) 受講後のアンケート調査の結果

① 短期研修講座の感想

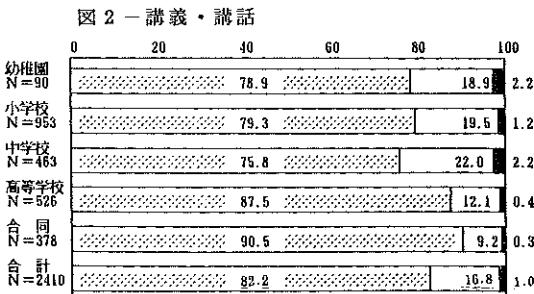
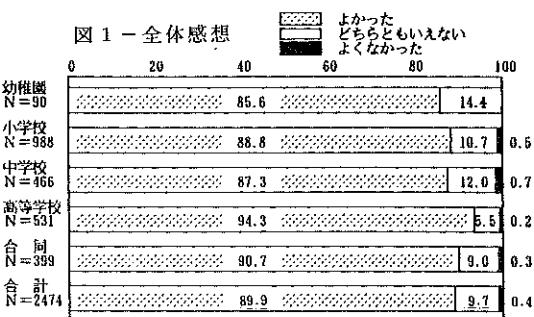


図3 - 実技・実習・演習

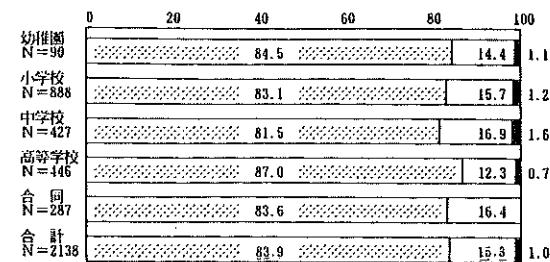
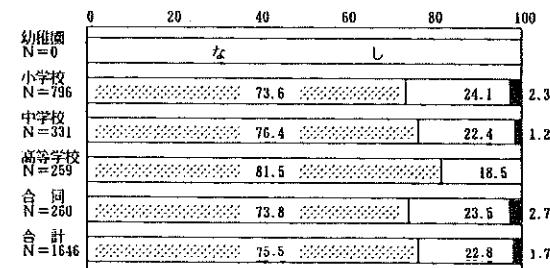


図4 - 実践発表(授業)・協議



② 役に立った事柄

ア 原理・理論的なもの

- 教師としての自覚、教育実践の反省と今後の心構え
- 教科・領域等に関する効果的な学習指導法
- 広い視野に立った見方・考え方
- 教育相談と児童・生徒理解及び学級経営の心構え

イ 実践的なもの

- 現場教師による具体的な実践発表
- 授業参観及び授業研究会
- 教材、教具、資料等の作成の仕方
- 学級経営の諸問題と解決法

ウ 実技、演習的なもの

- 学習指導案の作成
- 理科の実験観察
- パソコンの基礎技能の習得
- S-P表の作成
- 書写実技

エ 情報交換的なもの

- 実践発表での意見や情報の交換

オ 教育実践上の諸問題についての他校の取組

- 教育実践上の諸問題についての他校の取組
- ③ 受講後における現場での利用状況
- 講師の教育理論・方法、実践等を授業実践や生徒理解、教育相談に生かしている。

○実技・演習で習得したものを持続して活用している。

2 平成3年度の構想

本年度は、時代の要請と学習指導要領の改訂に対応すべく、一部講座の改廃を行った。新年度はこれを更に進め、次のような講座を新設する。

(1) 豊かな情操と感性を育むために

これまで1本であった小学校音楽科の講座を、発達段階に応じた研修にするために、低学年、中学年及び高学年の3講座に増設する。また、中学校美術科講座1本を新設する。

(2) 家庭科教育の充実のために

日常生活に必要な基礎的知識と技能を習得させ、家庭生活をよりよくしようとする態度を育てるための必要性が求められている。これに対応すべく、小学校家庭科講座1本を新設する。

〈付表1〉 短期研修講座(校種別概要)

校種	講座数	受講定員
幼稚園	1	80
小学校	42	1,106
中学校	27	570
高等學校	36	613
合同(幼・小・中・高・特)	20	493
計	126	2,862

〈付表2〉 短期研修講座(領域別概要)

領域	講座数	講座日数	受講定員
教科教育関係講座	67	171	1,424
教育経営関係講座	22	53	690
教育相談関係講座	11	51	326
情報教育関係講座	26	164	422
計	126	439	2,862

おわりに

平成元年3月に告示された新学習指導要領への対応を、よりスムーズに行えるように、当教育センターでは、研修講座の一部改廃とその内容の充実を図るために検討をしてまいりました。よりよい研修講座を設定し、児童・生徒の調和のとれた成長・発達のために役立ちたいと念じております。

「新教育課程と生活科」

大阪大学人間科学部助教授 梶田叡一

(6月19日(火) 小学校生活科(基礎)講座での講演をまとめたものです。)

1 生活科の誕生まで

今回の指導要領告示までの過去10数年間さまざまな論議がなされてきた。

第1に、「環境科」の発想である。この発想が出てきた理由は、小学校1・2年生の段階では、どこまでが自然的環境で、どこまでが社会的環境か、きちんと分けられない場合があるということである。

第2に、「環境科」に代わって、「合科的な指導」が強調されるようになった。その強調の1つのポイントとして、あまり教科の枠にとらわれることなく、子どもの興味・関心に基づいて活動させていくという考え方である。もう1つのポイントは、受け身の学習の在り方ではなく、子ども側からの自主的自発的な活動で構成される授業ができないかということである。

第3に、「環境科」か「合科」かという論争の中で、やはり子どもが自主的自発的に取り組んでいくような学びの場を、何らかの形で作る必要があるという意見が主流を占めるようになってきた。それを「自立科」と定義する人もいた。

第4に、「環境科」と「自立科」を合体したような構想が出てきた。これが「生活科」の誕生となっていく。つまり、「環境」の中に、「自分」というものを核としていく構想である。「自分」と自然とのかかわり、「自分」と人々とのかかわり、「自分」の生活と自分自身について考えさせていくとするものである。

その後、内容選択の10の視点がうち出され、生活科は、第二道徳だ、しつけ科だという論争が起きる時期もあった。結局10の視点は姿を消し、子どもの自然な育ちを期待する本来の生活科として誕生することとなった。

2. 生活科とは

生活科の特質や本質は、目標に明確に示されている。その終局のねらいは、「自立

への基礎を養う」ということである。この自立への基礎とは、身の回りの物を整頓する、自分のことは自分でできるなどの身辺自立を意味するものではない。これから始まる長い学校生活で、何よりもまず自分なりの内的必然性をもって追求し、探究していくという“学習上の自立”的土台づくりを意図している。

すなわち、何事にも積極的に関心をもって学習しようとする旺盛な意欲、あるいは最後まで追求し、やり遂げる強固な気力をもつことである。

そのためには

1. 具体的な活動や体験を通すこと。
2. 自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもつこと。
3. 自分自身や自分の生活について考えること。
4. 生活上必要な習慣や技能を身に付けさせること。

という4つの視点を重視していかなければならない。

3. 生活科の授業づくり

生活科は、改めていうまでもなく一つの教科學習である。それなりの「願い」や「ねらい」が意図された學習活動であるべきである。

本来、教育の基本的な在り方に3つのタイプがある。「教示の教育」(教え込みの教育)、「委任の教育」(個々人の自発性・自主性に任せる教育)、「援助の教育」(個々人の自発的自主的活動が可能なようにお膳立てし、支えていく教育)である。

生活科の授業こそ、「援助」の手立てを工夫しなければならない。それは、どのようなお膳立てをし、支えをすれば、一人一人が十分に活動し、大事なことに気づいてくれかということである。そして、自分なりの問い合わせをもって、自分なりの実感に基づき、自分なりに納得を求める追求・探究を続けさせるか、さらに、仲間との共通の広場に持ち出し、練り上げをしていってくれるかが授業として勝負どころである。

(文責 清 正幸)

平成2年度 研究紀要の概要

教育センターでは、教科・領域別に28のうち、研究主題を設けて研究を進めてきました。そのうち、20本の研究が平成2年度に完結しました。3年度4月には、各学校に「研究紀要第15集」として配布する予定です。教育活動の充実と改善のためにご活用いただき、ご批正を賜れば幸に存じます。

国際理解教育

学校教育において国際理解教育をどう進め行くかー将来あるべき日本人としての資質育成を求めてー

我が国の児童・生徒を、世界の中の日本人として信頼され、通用し、福祉に貢献する国際人に育てる上で、学校教育で実践可能な理論と実際を探求したものである。

小学校国語

作文指導における単元構成に関する研究

作文指導では、教科書教材を使った指導と技能の定着を図った練習学習と書く喜びを味わわせる書き広げによる指導が、独立した形で行われている。そこで、本研究では、技能の定着と意欲の向上をねらった単元構成について実践をもとに探ってみた。

小学校社会

生活科との関連を考慮した3年生地域学習に関する研究ー社会科導入単元を通してー

学習指導要領の改訂により、社会科は3学年からのスタートになった。生活科で培われた学習感覚を3年生の社会科に生かすための導入単元のあり方について、2校の研究協力校の実践をもとに探ってみた。

小学校算数

图形感覚を豊かにする学習指導のあり方

児童は主体的な操作的活動により自分の考えを筋道立てて表現し、説明を文章でまとめる力をつける。本研究では、小学校の三角形・四角形に関して、言葉で表現する能力の発達を同一問題で調査し、その能力を促進させる学習指導について探ってみた。



(高等学校国語科研究委員会)

小学校CAI

小学校における教育用ソフトウェアの開発ー児童の思考力を育成するソフトウェアの開発ー

今回開発した2本のソフトウェアは、ゲーム型のもので、ゲームを行なながら思考力を伸ばすことを目指している。GROPE Ver 1.0は算数科の数と計算、バイキン君は図形領域で利用可能である。

中学校国語

中学校における国語科書写指導の展開と工夫

中学生の文字意識の低下が大きな問題になっている。国語科の指導で文字への関心や表現欲求を正しい方向へと導く必要がある。本研究では、生徒の書写に対する興味・関心や書写力の実態を基に、書写指導を効率的に進めるための指導法を探求する。

中学校社会

地理・歴史並行学習の指導法の研究ー一年間指導計画の吟味と地歴関連の教材作成ー

中学校社会科は、分野固有の性格を尊重し、有機的な関連を積極的に図り、効果的な授業を実施しなければならない。そのため、生徒の生活経験や発達段階を考慮した、関連教材及び指導法の開発を試みた。

中学校数学

意欲ある学習態度を育てる論証指導のあり方ー第2学年の图形領域を通してー

画一化された教師主導型の授業を行っていることが、图形の証明嫌いの生徒を多くしていると考えた。そこで、具体的な操作や実験などの活動の場を設定した授業を行い、論証指導のあり方を探ってみた。

中学校理科

中学校理科における初期発生の教材化

「生命の連續性」における初期発生の教材確保は難しく、实物を見せないままの授

業展開になりやすい。そこで県内に分布する両生類を飼育し、受精卵の採卵や卵の大きさからカジカガエルが最適であることを確認した。

中学校英語**「聞く力」を養う指導法の工夫**

「聞く力」を養うためには、何よりも先ず、より多くの英語を生徒に聞かせることが不可欠である。そこで、普段の授業の中に「聞く」活動を可能な限り多く取り入れるために、指導の工夫と改善を試みた。

中学校CAI**中学校における教育用ソフトウェアの開発－情報活用能力の育成をめざして－**

パソコン通信の教育的利用の可能性を検討し、新学習指導要領で求められている情報活用能力の育成をめざし、パソコン通信ホスト局をシミュレートする教育用ソフトウェアSIMNETを開発した。

高等学校国語**高等学校標準学力検査問題作成の研究**

必要に応じて本県の高校入門期の国語学力を知るため上記のテーマに関する研究をした。のために予備調査問題を作成し、テストを実施した。また、調査の結果分析を経て標準学力検査問題を作成した。本研究はその過程を体得するためもある。

高等学校社会**地域素材の精選とその活用による歴史的思考力の育成**

生徒の生まれ育った地域こそは、先人の歴史と生活の舞台・発展的思考・願望の源であり、歴史的学習能力や社会認識を育て、人間に対する共感を深めるうえで有意義なものであることを研究したものである。

高等学校数学**高等学校数学標準学力テストに関する研究**

本研究委員会では、県下の先生方の協力を得て、参加希望の高等学校の生徒を対象に、数学Ⅰ（基本）、数学Ⅰ、代数幾何、基礎解析についての標準学力テストを実施し、その結果の集計、分析、考察を行った。

この報告書は平成元年分のまとめである。

高等学校理科（生物）

バイオテクノロジーを利用した生物実験の研究

教科書には、「核の移植実験」というバイオテクノロジーに関する記述がある。

この研究は、核移植の教材化をねらって、メダカの卵を用いた核の移植及びその実験装置の工夫を試みたものである。

高等学校理科（地学）**地電流の基礎的研究と簡易測定器具の開発**

地電流についての基礎的研究は、最近の地震学会等で注目を集めている。しかし、測定装置が高価なために各学校で購入することは困難である。そこで、授業やクラブ活動等の地質図作成に使える、手軽で廉価な簡易測定器具の開発を試みた。

高等学校英語**HELPING STUDENTS WRITE IN ENGLISH THROUGH TEAM-TEACHING WITH AN AET**

When a JTE's teaching is reinforced and students are given positive feedback by an AET, we can expect our students to be more motivated in writing English.

高等学校CAI**高等学校における教育用ソフトウェアの開発－教育用ソフトウェアのデータベース化を図るシステムプログラムの開発－**

教師の教科の専門性を十分に活かし、教師相互の情報交換を容易にしながら教育用ソフトウェアのデータベース化を図るための方法を検討し、そのために必要な学校現場用のシステムプログラムを開発した。

教育工学**学習効果を高めるためのビデオ教材の製作－中学校理科－**

理科では観察や実験が重視されているが、いろいろな事情でできないことがある。そこでビデオで補うことを考え、今回は佐賀県に見られる発電施設を紹介しながらエネルギーの流れを扱うビデオ番組を制作した。

特殊教育**小・中学校特殊学級における交流教育のあり方について**

県内の小・中学校で実施されている特殊学級と普通学級との交流教育について調査をおこない、その調査をもとに県内の交流教育の実態を明らかにし、望ましい交流教育のあり方を探ってみた。

指導のチェックポイント**中学校国語
国語科書写指導の工夫****1 はじめに**

近年、中学生の書く文字が乱雑で読みにくく、文字意識も希薄化していることが教育上の大きな問題になっている。この現象への対応として、新学習指導要領において、書写は「表現」から「言語事項」に変更され、内容や授業時数などの面でも大幅に強化されることになった。国語科書写の指導において、文字への関心や文字表現の欲求を正しい方向へと導く必要がある。

生徒の書写に対する興味・関心や書写力の実態調査を基に、効果的な指導の方法を探りたい。

2 書写に関する実態調査

県下2中学校の1～3学年各100名ずつ、計300名を対象に調査した。

(1) 書写に対する意識調査

① 書写の「好き嫌い」について
「大好き」「好き」と答えた者の割合は、2年男子の8%を最低に、全体的に低い回答率である。男女別では、圧倒的に男子の方が低い。「面倒くさい、手が疲れたり汚れたりする、難しい」などの理由で、書写は全体に敬遠されていると言える。

② 自分の字に対する関心について

自分の書く字に「満足している」と答えた者の割合は低く、55%の者が「不満」と答えている。更に、「何とも思わない」と答えた者が34%を占め、関心の低さを示している。

③ 自分の字への影響について

自分の書く字はだれかの影響を「受けている」と答えた者は、全体の21%程度である。「親や兄弟」「友人」の影響が多く、「先生」や「書写的教科書」と答えた者はほとんどいない。

④ 姿勢・執筆について

姿勢と執筆は密接不離の関係にある。全体の約40%の者が、人さし指を反らせて指先に力が入りすぎた持ち方をしている。また、芯先に近い部分を持つために、芯先が見えにくい状態になる。従って、背中を丸め顔を移動させ、のぞき込むような姿勢をとるのである。

⑤ 筆記用具について

生徒が最も多く使用するのは、シャープペンシルであり、70%を占めている。濃さはHBが最も多い。

(2) 書写力に関する実態調査**① 字形・筆順について**

字形は「母、糸、雪、遠、天」について、筆順は「区、成、田、馬、発」について調査した。字形・筆順ともあいまいさが目立つ。一定の筆順で書くことによって、字形が整えやすく文字が覚えやすいなどの効果が考えられる。筆順指導とともに、文字の細部にわたって形を理解させる必要がある。

3 書写指導の工夫

以上のような実態を基に、生徒の書写に対する興味・関心を高め、書写力を向上させるための効率的な指導の方法を、次の3点に視点を置いて探るものである。

(1) 学習指導過程の工夫

学習指導過程を①意識化、②焦点化、③技能化、④定着化の4段階に分けて、目標や基準に基づき、自分の学習の過程や成果を確認しながら主体的に取り組ませる。

(2) 硬・毛の関連指導

毛筆書写学習の場合、④定着化の段階において、毛筆と同文字もしくは同

技能系統の文字を硬筆学習に転移させることによって、技能の定着化を図る。

指導展開例（行書の学習一点画の省略と筆順の変化 本時1/2）

指導過程	指導事項	学習活動	指導上の留意点	資料・準備
意識化	1. 本時の学習目標を確認させる。	○「初霜」行書で書くことを知る。	・自然の移り変わりに目を向けさせ、教材に対する関心を持たせ、雰囲気作りをする。 ・前時までの毛筆での行書の学習を想起させる。（点画の丸み、連続、省略など） ・手本を見ないで1枚書かせる。 ・一字一筆で書くよう指示する。 ・試書の後で手本を掲示して楷書と行書の違いを見覚させる。	教科書
	2. 試書きさせる	○試書きする。 ・正しい姿勢で、筆の持ち方に注意して書く。		
	3. 基準をつかませる。	○基準を知る。 ①「初」の衣へんの筆順の変化 ②「霜」の雨かんむりの点画の連続と省略 ③「和」の「木」の部分の三、四画の連続	・筆使いの要点は、教材提示措置を使ってゆっくり提示し、理解させる。 ・三つの基準については、空書をさせたり、教材提示措置を生徒にも使用させるなどして理解を確認する。	楷書、行書で比較した基準カード 教材提示装置
焦点化	4. 練習させる。(1)	○基準に添って練習する。	・基準に注意して練習させる。 ・机間巡回をし、必要に応じて手を取って指導し、添削する。	朱筆・朱墨
	5. 批正させる。	○相互批正をする。	・基準をもとに相互批正をさせ、不十分な点については更に指導する。 ・基準に照らし、試書と比較して評価させる。 ・練習(2)の作品は提出させる。	赤ペン
技能化	6. 練習させる。(2)	○筆順に気を付けて不十分なところを練習し、自己評価する。	・基準に照らし、試書と比較して評価させる。 ・練習(2)の作品は提出させる。	評価・感想票
	7. 硬筆に転写させる。 (次時予告)	○学習の成果を硬筆に生かす。	・「衣へん」「雨かんむり」「木へん」のつく漢字を中心に行書で書かせる。（鉛筆）	硬筆練習シート
定着化				

きるので、理解に有効であろう。また、生徒自身に使用させることによって、集中した主体的な学習を展開することができよう。

という願いは強いものがある。基準カード、練習シート、自己評価票等、創意工夫しながら楽しく取り組める書写授業を創造していく必要がある。

(所見 杉 原 豊 秋)

一生徒指導

生徒指導の今目的課題

「佐賀県における児童・生徒の生活体験に関する調査研究」を基に

1 はじめに

「このごろの子どもたちは……」という大人たちの言葉はいつの時代にもよく耳にする言葉である。ただ、最近の子どもたちに見られる変化は、時代の流れということだけでは簡単に片付けられないある種の根深さがあるようだ。子どもたちの問題傾向については今後様々な形を生み出しながら、一層増加するであろうとする認識が一般的であり、同時に子どもの感覚や考え方、行動がよく理解できなくなってきた、と嘆く教師も多くなってきた。つまり、指導そのものよりも、子どもの存在自体が教師にわからなくなっているということであろう。

子どもがどう変わりつつあるのか。そのことを把握するのはかなり難しい。ここでは当センターが県内の小・中・高校47校の協力を得て、子どもたち約2,400名に行なった「佐賀県における児童・生徒の生活体験に関する調査研究」（以下、「生活体験調査」と呼ぶ）の中から遊び体験を中心に取り上げて、子どもたちの変化を概観し、生徒指導の今日的課題を考察してみたい。

2 遊びを失った子どもたち

遊び場面における平均的な子どもたちの姿を、生活体験調査からイメージしてみよう。同じクラスか同学年の者3、4人が、仲間の部屋に集まっている。子どもたちに

人気のある曲が流れ、とりとめもなくおしゃべりが続く。雑誌や漫画を読んでいる者もいる。それらにあきると、テレビのスイッチが押される。しばらく、番組を見ているが、替わってファミコンがつながれ、プラウン管にはゲームの主人公が飛びはねる。交替でひと通りファミコンの操作を皆が終えると、トランプなどのゲームが始まる。男子であればパソコンがこれに加わる。こうした遊びに1~3時間が費やされていく。

反面、年齢が進むにつれて、仲間から離れて自分の世界にひきこもり、ほとんど遊ばなかったり、一人でテレビやファミコン等で時を過ごす子どもたちが増えてくる。

このことを、最近（1～2ヶ月）の遊び体験で具体的にみてみると、「友だちとはとんど遊ばなかった」者は、小学生で23%，中学生で40%，高校生で49%を占め増加傾向にある。特に女子は中学生・高校生とも各々半数を越えている。また、「一人で遊ぶことが多かった者」と「ほとんど遊ばなかった者」の合計が既に小学生の男子で34%，女子で44%に達する。男女とも中学・高校と進むにつれて増加し、高校では男子57%，女子65%を占める。

「ほとんど遊ばなかった」の理由として「何となく疲れて遊ぶ気にならなかった」をあげた者が小学生で34%，中学生・高校生で各々約45%を占める。この他，理由として「遊ぶ友だちがいなかった」が小学生で11%に達していること，「友だちと遊ぶのはわざらわしい」が中学生で8%（男子は11%）を占めていることは注目される。

「一人遊び」の理由として、「遊ぶ友だちがいなかった」が小学生で17%，中学生で9%，高校生で10%を占める。また「一人の方がよかった」が小学生・中学生で約20%，高校生で31%に達する。さらに、「ただ何となく一人で遊んだ」が小学生・中学生で約40%，高校生で48%に達する。

3 生徒指導の今日的課題

遊びは人間形成に大きな影響力を持っている。仲間との遊びを通して、子どもたちは自己中心志向を徐々に改変することを学ぶ。それは極端な他者中心でもなければ、自己中心の世界でもない、程よい他者との

定位、程よい心的距離を保つことを学ぶ。他者との協力、役割分担、創造力、自主性など遊びという「自然の学校」で形成されるものは枚挙にいとまがない。しかし、生活体験調査をみると、子どもたちの遊びの体験は大きく変化し、遊びそのものの減少、子どもの孤立化現象に伴い、友人関係は均質化し表面的なものとなっている。

さらに、生活体験調査では遊びだけではなくて、生活場面でのさまざまな直接体験（感動体験・離別や死別の体験・遠出体験など）が少ないとする結果が出ている。こうした現状をみると、子どもたちが「からだ」を用いて学んでゆく機会を豊富に与えていく必要があると考えられる。近年、学校生活の中で人間関係づくりが苦手な生徒が増えており、これが校内暴力やいじめの原因の一つになっているという指摘が多い。このような人間関係づくりの未熟さに対応する指導・援助を積極的に図りながら、子どもたちが相互啓発しあい、自己実現できるような人間関係の充実をはかることが急務であると考える。具体的には①本ものの自然体験②異年齢の集団で活動するタテ社会体験③勤労体験④興味関心のあることに熱中して取り組むことができる自発的で自己充足の体験⑤ボランティア活動などの社会参加体験など、比較的自由に、自発的にできるような体験を通して、子どもたちの「魂に揺さぶり」をかけていくことが考えられる。その際、留意されなければならないことは、発達課題に即した活動内容が設定されることが大切である。そして、「魂の揺さぶり」には学校が家庭や地域の教育機能を高めるために、それらとの連携・協力をはかることがさらに重要となる。

4 おわりに

今日、生徒指導は多くの領域に広がりつつある。このことは生徒指導の課題がそれだけ錯綜したり、複合化していることを意味している。この現実は、生徒指導はすべての教師が行う教育機能であるという自覚の重要さを再認識することを示唆しているのではないか。

(所員 芦 田 修 一)

長期研修生寸感 研鑽を積む

本年度は、長期研修生として小中高の24名の先生方を迎えるました。先生方は所報54号でお知らせした研究テーマのもとでそれぞれ研修に励んでおられます。また、教師としての力量を高めるための各種の研修にも参加されています。研修生活の中で、ふと洩らされたつぶやきを集めてみました。なお、次の3名の先生方は、既に研修を終えられ、現場で活躍中です。

五十嵐弘文(伊万里商高) 大川内弘紀(杵島商高) 横井繁(唐津農高)

新鮮と充実の日々 -小学校国語-

厳木小学校 峰 茂樹

教職について以来、これ程多くの教育書を短期間に読んだことはなかった。勉強不足を痛感している。得るものが多く、頭の中がパンクしそうな毎日の研修である。

行脚 -小学校社会-

白石小学校 吉賀 敏文

ちまたでは「ファジー」が大流行。しかし我が研修の小部屋は、その曖昧さが及ばない修行場だ。授業は「材料七分に腕三分」、新鮮な歴史素材を求めてまた行脚。

試行錯誤 -小学校算数-

旭小学校 秋山 博

手さぐりの状態から、試行錯誤の繰り返しで研修を進めてきた四ヶ月間。暗中模索の中から、やっと自分が探し求めているものが一筋の光として射してきたようだ。

見通し -小学校算数-

長松小学校 井上 三義

ひたすらに、見通しを生かす授業の創造を問い合わせてきた四ヶ月。この研修で得た結論は、まず教師が見通しをもって授業に臨むこと。これを新たな出発点としたい。



(地歴巡検 水上不動寺にて)

研鑽を積む

本年度は、長期研修生として小中高の24名の先生方を迎えるました。先生方は所報54号でお知らせした研究テーマのもとでそれぞれ研修に励んでおられます。また、教師としての力量を高めるための各種の研修にも参加されています。研修生活の中で、ふと洩らされたつぶやきを集めてみました。なお、次の3名の先生方は、既に研修を終えられ、現場で活躍中です。

五十嵐弘文(伊万里商高) 大川内弘紀(杵島商高) 横井繁(唐津農高)

新鮮と充実の日々 -小学校国語-

厳木小学校 峰 茂樹

教職について以来、これ程多くの教育書を短期間に読んだことはなかった。勉強不足を痛感している。得るものが多く、頭の中がパンクしそうな毎日の研修である。

行脚 -小学校社会-

白石小学校 吉賀 敏文

ちまたでは「ファジー」が大流行。しかし我が研修の小部屋は、その曖昧さが及ばない修行場だ。授業は「材料七分に腕三分」、新鮮な歴史素材を求めてまた行脚。

試行錯誤 -小学校算数-

旭小学校 秋山 博

手さぐりの状態から、試行錯誤の繰り返しで研修を進めてきた四ヶ月間。暗中模索の中から、やっと自分が探し求めているものが一筋の光として射してきたようだ。

見通し -小学校算数-

長松小学校 井上 三義

ひたすらに、見通しを生かす授業の創造を問い合わせてきた四ヶ月。この研修で得た結論は、まず教師が見通しをもって授業に臨むこと。これを新たな出発点としたい。

再出発 -小学校教育相談-

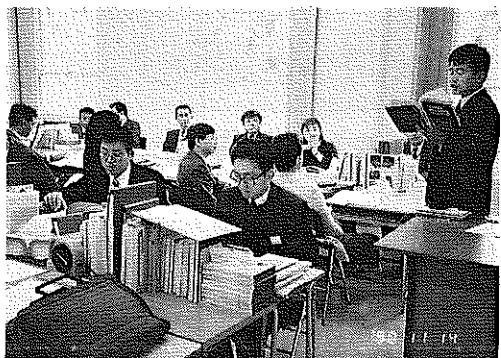
吉田小学校 田中 安子

さまざまな生き方を学び、共に喜びや悲しみに触れることができるようになった今日この頃の私。研修を原点にし、新しい気持ちで歩み始めようと思う。

評価の意義 -小学校教育評価-

思齊小学校 坂本 憲昭

研修を進めるほど「教育評価」の持つ授業改善の機能の重要性を強く感じてきた。指導と評価の相互作用効果を最大限にひきだす授業展開を今後とも考えていきたい。



(水曜日談話会)

充実 -小学校CAI-

有明東小学校 山口 隆康

研修の機会を与えてもらったことを感謝しながら、迷い、とまどい、助けられ、教えられて、喜びあって、非常に楽しく有意義な生活を送っています。

墨守ではなく -中学校国語-

三瀬中学校 石橋 道秀

木下順二氏の群読にならい、大村はま先生の群読に耳を傾け、高橋俊三先生の群読の実践論理をもとに自分らしい群読の創造を目指したい。

一步一歩 -中学校社会-

鍋島中学校 森田 利幸

現場ではとても得られない有意義な日々。本をこれだけ読めたのは何年ぶりだろうか。40の手習いで始めたワープロもなんとか自分のものになりつつあります。

センターにて -中学校道徳-

大町中学校 北島 勝典

道徳に限らず自分の勉強不足を痛感しています。この半年間はたいした結果もだせなく残念ですが、この刺激は今後の教員生活を充実なものにしてくれそうです。

伝統と創造 -中学校教育工学-

諸富中学校 小熊 英明

言葉が生きているなら、生徒に語れる言葉を見つけたい。自分に問い合わせて自分の言葉を見つけたい。原子番号36番の研究、教え子たちと言語と仲間に感謝したい。

学ぶ喜び -中学校CAI-

金泉中学校 柴田 精治

教師になって、教えることの難しさを痛感する毎日を送っていましたが、ここへ来

て学ぶことの楽しさを思い出しました。現場に戻っても、この気持ちを大切にしたい。

実践と喜び -高等学校特殊教育-

大和養護学校 畠山富士男

念願の感覚統合訓練を実践できた。また様々な経験を通して障害児教育への心構えを再確認でき、貴重な研修に大変感謝している。今後この指導法を応用したい。

詭弁と駄弁 -高等学校社会-

有田工業高等学校 森 勝俊

五里霧中のなか、やっと小さな灯りが。しかし、距離はいっこうに縮まらない。先を行く足音も今は聞こえない。そんな焦りを感じながらもマイ・ペースのこの頃です。使えるために -高等学校CAI-

東松浦高等学校 大宅 清信

パソコンのデータベース的利用を中心に行修をしているが、この頃「使える」という言葉がCAIでいかに重要であるかを肌で感じている。この体験を大切にしたい。

受験勉強 -高等学校情報処理-

鳥栖高等学校 小柳善三郎

毎日、頭をフル回転していろいろな難問(?)を取り組んでいますが、このように頭をフル回転しているのは20年前の大学受験勉強以来ではなかろうか。

指標 -高等学校情報処理-

唐津商業高等学校 重 宏明

教師生活の中で、じっくり研修に打ち込めたことは、大変幸せです。周りの人達に感謝し、今後現場へ帰り、この研修を役立て指導していきます。



(ソフトボールをして)

私のすすめる「一冊の本」

「哲學初步」 (岩波書店)

田中 美知太郎

哲学とは何か。国語辞典には「世界・人生・思考などの根本原理をきわめる学問」とある。しかし、これではよくわからない。

本著は、①哲學とは何か②哲學は生活の上に何の意味をもっているか③哲學は学ぶことが出来るか④哲學の究極において求められているもの…4つの目次によって構成され、哲學の基礎が論理的にわかりやすく述べられている。

伊万里市立牧島小学校

校長 馬場崎 満朗

「子どもはやっぱりお母さん」

(雷鳥社) 吉岡 たすく

子どもの成長過程で、母親のはたす役目、先生の言葉が、子どもにどんな影響を与えるかなど、NHK“おかあさんの勉強室”で放送されたり、朝日新聞その他に掲載されたものを含め約20篇から成り、前半は母親の子どもに対する理解の大切さ、そして後半は吾々教師が気づかずにいることをばりと指摘した、父母、教師に勧めたい本である。

三根町立三根中学校

校長 島 審 弘 幸

レファレンス

お応えします！

教育センターの事業の一つに、レファレンス（照会）・サービス活動があります。これは、図書類の幅広い利用を意図して行うもので、学校からの問い合わせ、来館者の要求に応じて資料を紹介し活用の便を図るものであります。

本年度も、県内小・中・高校はじめ、教育関係、他県の教育センター、そして個人より多くの問い合わせがありました。その内容は次のようなものが多く、レファレンスにお応えして検索、紹介いたしました。

「社会科探究学習の指導計画と展開」

(明治図書)

今日、社会の変貌は激しい。この中で子供は主体的に対応しながら、生きらねばならない。社会科の果たす使命は大である。

だが、社会科の免許を有する人は多いが造詣ある人は案外少ない。

本書は社会科の授業をどう構築し、生活の見方・考え方をどう育てていくのか、実践を通し、一つの試案を提起している。

ぜひ、ご一読いただきたい。

嬉野町立轟小学校

校長 千葉 淳己

「敦煌」 (新潮社)

井上 靖

敦煌は、いわゆるシルクロードの起点として知られている。この小説は敦煌の地理的、歴史的な特殊性や、およそ950年前頃の西域の概要を知ることができる。

この町の千仏洞には、九世紀の間、誰にも知られる事なく、古来の仏典が数万巻も秘蔵されていた。史実は別として、石窟の神秘的、伝説的な物語りに至る出来事を興味深く描かれている。

佐賀工業高等学校

校長 末次 重道

- 研究紀要（各県教育センター・県内研究発表校・全国大学等で発行したもの）
- 参考書・文献・教科書・指導案等
- 九州管内先進校（研究校）について
- 教育に関する歴史的資料について
- 県内各学校の研究動向について

上記のような事柄について、お尋ねの向きがございましたら、「教育資料係」へお問い合わせください。

(TEL 0952-62-5211内線42)

